小さなまほうのはこ

みなと扇風機

あるところに、一人のまずしい男がいました。
男には、ベルという　なまえの、むすこがいました。
ベルは　はたらきもので、村の子どもたちが　ぽけっと〇んすたー　であそんでいるときも、はたけをせっせとたがやしていました。
ベルは、まずしいせいかつに　いっかいも、もんくをいったことはありませんでした。
それでも　ときどきベルは、よる、はをみがいてベッドにはいると、じぶんのほしいものをあたまのなかにおもいうかべてしまうのでした。

ある日のことです。ベルがいつものように、はたけをたがやしていると、土のなかから　見なれないものがでてきました。
それは　ビードロのようにピカピカとしていて、うらにはリンゴの絵が　かかれた小さなはこのようでした。
ベルが手にとって　ながめてみると、あけるためのとってはなさそうでしたが、小さなボタンのようなものがありました。
ベルは、なにがおこるのか気になって、そのボタンをおしてみました。
すると、小さなはこが光りだして、なかから　ベルのせたけの二ばいはあるであろう　大きな老人があらわれて　いいました。
「わたしのなまえはグラハム。して、そなたの名はなんじゃ」
ベルは、おどろいてうまくしゃべることができませんでしたが、なんとか　なまえを言うことができました。
老人は、はなしをつづけます。
「ベルとやら。そなたは見たところ、まずしさにまけることなく、せっせとはたけをたがやしている、はたらきもののようじゃ。そんなそなたに、そなたのほしいものを三つ、さずけよう」
ベルは、またしてもおどろきました。
ほっぺをいちどたたいてみましたが、しっかりと　いたみをかんじます。どうやら、ゆめではないようです。
「なんでもいいぞ。ただし三つまでだがな」
と、グラハムはいいます。
ベルは、さんざんなやみましたが、一つめは、おかねをもらうことにしました。
おかねがあれば、てつでできた、くわをかうことができますし、麦だって山ほどかうことができます。
「おかねをたくさんください」
と、ベルが言うと、
「そうか。ならば、これをさずけよう」
と、グラハムはこたえ、手からなにか　みどり色の四角いものをだして、ベルのもつ、小さなはこに入れました。
「それは　びっと〇いん　というものでな、ちょっとほかの人たちと　とりひきにさんかするだけで、おかねがどんどんふえていく、というものじゃ」
と、グラハムは　ほこらしげにいいました。
まるでゆめのようなはなしでしたが、もともとゆめのようなものです。ベルはびっと〇いんをありがたく、もらうことにしました。
「二つめは、ともだちをください」
と、ベルはいいました。
というのも、ベルにはともだちが、一人もいなかったのです。それもそのはずです。ベルは、村のみんながあそんでいるときも、一人でせっせとはたけを　たがやし

ていたのですから。
「なるほど。ならば、これをさずけよう」
グラハムはそういうと、ふたたび手から四角いものをとりだして、小さなはこにいれました。
「それは、ラブ〇ラス　というものじゃ。かわいい女の子たちとなかよくなれる、すぐれものじゃ。しかも、いつでもどこでも、あうことができる」
グラハムの、このことばをきいて、ベルはとてもよろこびました。
「さて、三つめはどうする？」
と、ベルはグラハムにうながされましたが、ベルにはどうしてもほしいものを、きめられませんでした。
「それならば、ほしいものがきまったときに、もういちどわしをよびなさい。その小さなはこに、ヘイ、グラハム、と言えば、いつでもでてくるでな」
そう言いのこして、グラハムはきえてしまいました。
ベルは、しばらく小さなはこをながめていましたが、きょうのしごとが　まだおわっていないことにきづいて、あわてて　はたけのしごとにもどりました。

それから、十日ほどがたちました。
小さなはこのびっと〇いんは、じゅんちょうにふえ、ベルには、女の子のともだちも三人できました。
しかし、ベルはなにかが　ちがう、とかんじていました。びっと〇いんはふえましたが、麦も、てつのくわも手にはいりませんし、いつのまにかびっと〇いんが　へっていることもありました。
なかよくなった女の子たちも、なにをはなしても、おなじようなへんじしか　してくれません。きょうあったできごとを、いっしょうけんめいにはなしても、ただむなしいだけです。
ベルはグラハムをよびだしていいました。
「三つめは、てつのくわをください」
「なんじゃ、それでいいのか？　ほかにもたくさんあったであろう」
と、グラハムはこたえました。
ベルは少しかんがえたあと、こういいました。
「いいんです。どうやらほしいものというのは、この手でたがやさないと、手にはいらないようですから。
それから、びっと〇いんとラブ〇ラスも、もういりません」
グラハムは　もうなにもいわずに、てつのくわを手からとりだしてベルにわたしました。
そして、あとかたもなくきえてしまいました。
それから、小さなはこが光ることは、もうありませんでした。

え・おえかきテンメンちゃん